ダニエル書7章

四つの獣と預言と審判

2024年9月

ダニエル7章の学び

大きく分けて二つに分けられる

1節〜14節、15節〜28節

7章のポイント：

1. ダニエル書全体の<u>中心的</u>な章。
2. <u>壮大な預言的パノラマ</u>（2章と似ている）
3. <u>終わりの時の審判が描かれている</u>

7：1　「バビロンの王ベルシャザルの元年」。ーーーダニエル2章の夢の時から、約50年後。ネブカデネザルの孫の時代。

7：2「わたしは夜の幻のうちに見た。見よ、天の四方からの風が大海をかきたてると」ーーー

四方から＝全世界を意味する。世界帝国に関わる出来事。

風＝戦争、騒乱、動乱。

大海＝諸国民、群衆

7：3「**四つの大きな獣が海から上がってきた**」

四つの大きな獣＝17節、23節に答えがある。つまりこの獣は、王様であり、国家。

世界帝国を表す、2章と7章の表現の違いは　**金属の巨像、獣。**

4節から獣の説明。

7：4 第一のものは、ししのようで、わしの翼をもっていた。

**　わたしが見ていると、その翼は抜きとられ、**

また地から起されて、人のように二本の足で立たせられ、

かつ人の心が与えられた。

　　これはネブカデネザルが亡くなった後、バビロンが弱体化したことを表す。

7：5 見よ、第二の獣は熊のようであった。これはそのからだの一方をあげ、その口の歯の間に、三本の肋骨をくわえていたが、これに向かって『起きあがって、多くの肉を食らえ』と言う声があった。

「第二の獣は熊のようであった。」メディア・ペルシャのあった場所は山の多いところ。だから熊の描写。

「からだの一方をあげ」＝メディアとペルシャの連合国だが、ペルシャが圧倒的に優勢だったから。

「三本の肋骨をくわえていた」＝当時近隣の三つの強国を征服したから。（リディア、新バビロニア、エジプト）

『起きあがって、多くの肉を食らえ』＝ペルシャが大遠征をして多くの国を支配下におくこと。

7：6 その後わたしが見たのは、**ひょうのような獣**で、その**背には鳥の翼が四つ**あった。またこの獣には**四つの頭**があり、**主権が与えられた。**

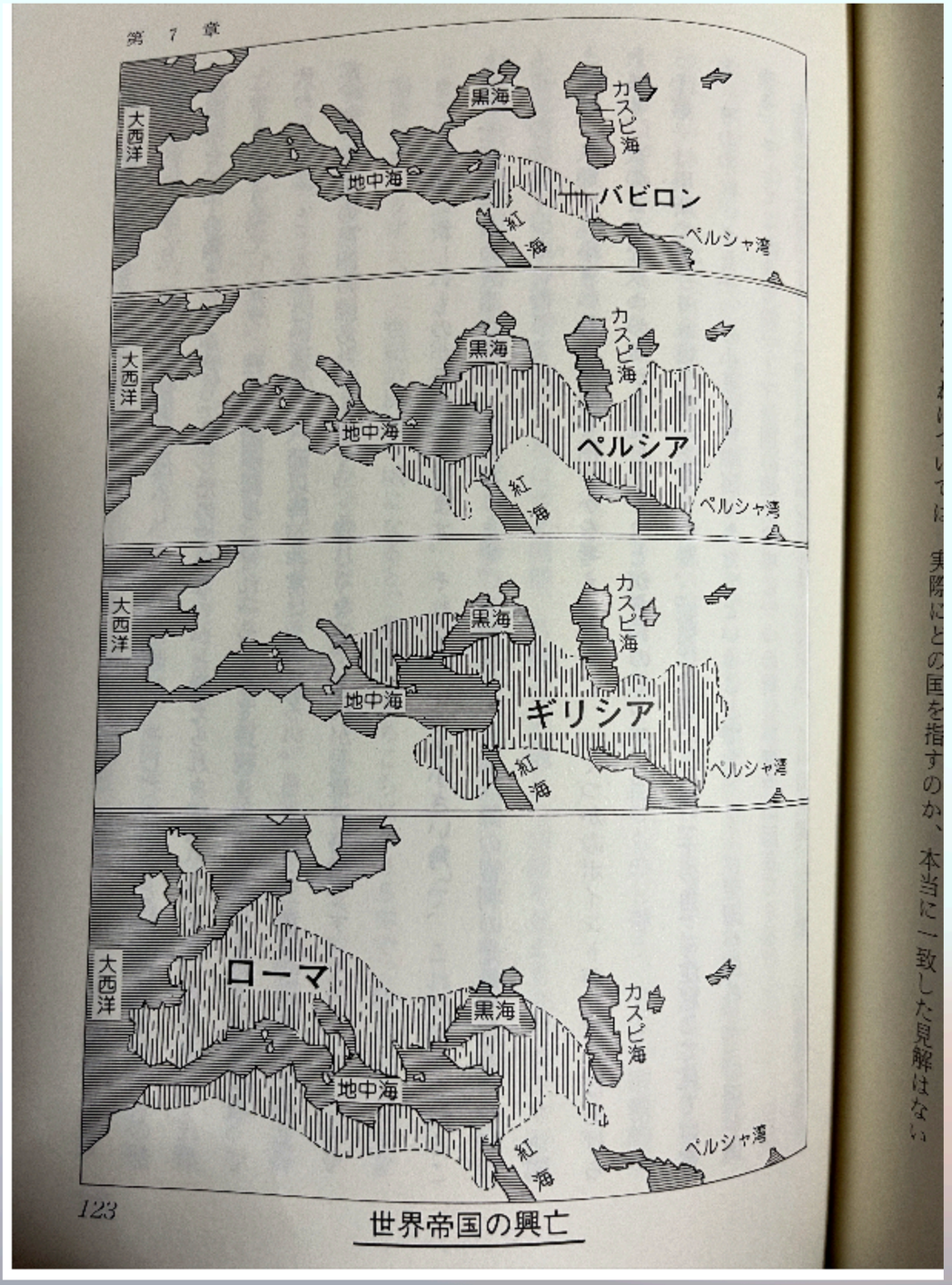
ギリシャ。

「**ひょうのような獣**」アレキサンダー大王の驚くべきスピードでギリシャ帝国を建設したため。ひょうのように早い意味。

アレキサンダー大王はアル中だった。体が弱っていた時、マラリヤにかかって32歳で死んだ。（紀元前356年ー323年）

彼の死後、四人の将校が国を四分割したので、四つの頭。

カサンドロス、リュシマコス、セレウコス、プトレマイオス。セレウコスとプトレマイオスは11章で、北の王、南の王として登場。



世界帝国の興亡

上から、

バビロン

メディア・ペルシャ

ギリシャ

ローマ

7:7 その後わたしが夜の幻のうちに見た**第四の獣**は、**恐ろしい、ものすごい、非常に強いもの**で、**大きな鉄の歯**があり、**食らい、かつ、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。**これは、その前に出たすべての獣と違って、**十の角**を持っていた。

ローマ帝国

第四の獣は、**恐ろしい、ものすごい、非常に強いもの**で、**大きな鉄の歯**があり、**食らい、かつ、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。**

2：40で、「**第四の国は鉄のように強い**」。

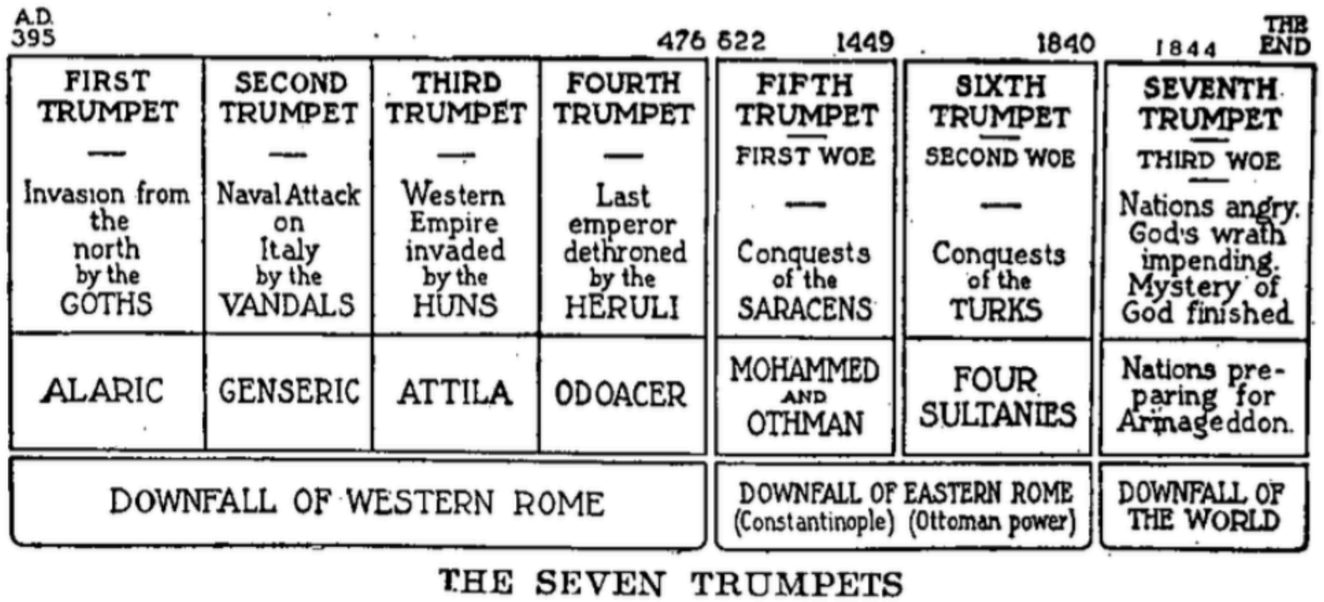
「**十の角**を持っていた。」＝24節　「**十の角はこの国から起る十人の王**である」

7：8 わたしが、その角を注意して見ていると、その中に、また**一つの小さい角**が出てきたが、この小さい角のために、**さきの角のうち三つがその根から抜け落ちた。**見よ、**この小さい角には、人の目のような目があり、また大きな事を語る口があった。**

角は、権力を表します。**一つの小さい角　ローマ帝国が倒れて十の国ができるのですが、そのローマの領土の中一つの新しい権力が起きてきます。**

三つが抜け落ちたとは、三つのゲルマン国家（ヘルル、ヴァンダル、東ゴート）がローマ教会を後押しする東ローマ帝国によって順次討伐されていったことを表すと理解されています。

＊ご参考まで



THE SEVEN TRUMPETS

AD 395 / AD 476 / AD 622 / AD 1449 / 1840 / 1844 / 恩恵期間終了

第一のラッパ	第二のラッパ	第三のラッパ	第四のラッパ	第五のラッパ	第六のラッパ	第七のラッパ
ゴート族による 北からの侵入	ヴァンダルによる イタリアへの海からの攻撃	フン族による 西ローマ帝国への侵入	ヘルールによる 最後の皇帝王座剥奪	第一の災い サラセンとオスマンの征服	第二の災い トルコの征服	第三の災い 国々の怒り、神の怒り、神の奥義の終わり。
アラリック王	ゲンセリック	アッティラ	オドアケル	モハメド＆オスマン	4人のスルタン	国々、ハルマゲドンに備える
西ローマ帝国の崩壊				東ローマの崩壊		世界の崩壊
黙8：7	黙8：8—9	黙8：10—11	黙8：12	黙9：1—12	黙9：13-21	黙10：1-14 11:15-9

天の審判の光景：9節～14節

9 わたしが見ていると、**もろもろのみ座が設けられて**、**日の老いたる者**が座しておられた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりもののない羊の毛のようであった。その**み座は火の炎であり、その車輪は燃える火**であった。

もろもろのみ座が設けられて＝裁きの光景の描写

日の老いたる者＝神。衣や、頭の毛の描写は神の神聖さの象徴の描写

その**み座は火の炎であり、その車輪は燃える火＝**神のご臨在を象徴。エゼキエル　1章には、神のご臨在が「輪」で表されています。

10 彼の前から、**ひと筋の火の流れ**が出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、**かずかずの書き物が開かれた。**

天の審判の光景：9節～14節

10 彼の前から、**ひと筋の火の流れ**が出てきた。**彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。**

ひと筋の火の流れ＝これは汚れを清め、悪を焼き尽くす火。

彼に仕える者は千々・・・＝審判のために仕え、また証人となる天使たち

審判を行う者はその席に着き＝神による審判、さばき、私たちはこれを調査審判と呼んでいます（**再臨前審判**）。裁きがなされる前に、天の記録が確かめられねばなりません。実際に裁きが行われるのを「**執行裁判**」と呼びます。この7章の「審判」はキリストの再臨の前に行われるいわゆる「調査審判」と考えることができます。

天の審判の光景：9節～14節

10 彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。

かずかずの書き物が開かれた=

「命の書」（ピリピ4：3、黙示録21：27、黙3：5）、

「覚えの書」（マラキ3:16、ネヘミヤ13：14、詩篇56：8）、

「罪の記録」（イザヤ65：6-7、マタイ12：36-37）

天の審判の光景：9節〜14節

7:11 わたしは、その角の語る大いなる言葉の声がするので見ていたが、**わたしが見ている間にその獣は殺され、そのからだはそこなわれて、燃える火に投げ入れられた。**

7：12 その他の獣はその主権を奪われたが、その命は、時と季節の来るまで延ばされた。

この11節は、小さい角によって象徴される組織の終局。

12節はわかりにくいですが、さまざまな解釈がありますが、対照的に四つの獣があって、そして小さい角がある。話の流れとして、

最初に四つの獣が出てきた→小さい角の話→小さい角の滅び→

最後に他の獣の滅び、になっています。ABBAのスタイル。

しかし、重要なのは13節以降です。

天の審判の光景：9節〜14節

13 わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、**人の子のような者**が、**天の雲に乗ってきて**、**日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。**
14 彼に**主権と光栄と国とを賜い**、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。**その主権は永遠の主権**であって、なくなることがなく、**その国は滅びることがない。**

人の子のような者が、**天の雲に乗ってきて＝**これは明らかにイエス・キリストです。天の雲に乗ってきては、天的な存在です。

雲というのは、たいてい、神のご臨在と栄光の象徴。

日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。　＝調査審判の働きに就かれるキリストのこと。

主権と光栄と国とを賜い＝調査審判が終わる時点で、御国がキリストのものとして与えられる。

天の審判の光景：9節〜14節

13 わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、**人の子のような者**が、**天の雲に乗ってきて**、**日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。**
14 彼に**主権と光栄と国とを賜い**、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。**その主権は永遠の主権**であって、なくなることがなく、**その国は滅びることがない。**

人の子のような者が、**天の雲に乗ってきて＝**これは明らかにイエス・キリストです。天の雲に乗ってきては、天的な存在です。

雲というのは、たいてい、神のご臨在と栄光の象徴。

日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。　＝調査審判の働きに就かれるキリストのこと。

主権と光栄と国とを賜い＝調査審判が終わる時点で、御国がキリストのものとして与えられる。

再び獣の描写：15節ー24節　（割愛）

重要な預言：25節〜28節

25 彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、彼の手にわたされる。
26 しかし審判が行われ、彼の主権は奪われて、永遠に滅び絶やされ、
27 国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与えられる。彼らの国は永遠の国であって、諸国の者はみな彼らに仕え、かつ従う』。
28 その事はここで終った。われダニエルは、これを思いまわして、非常に悩み、顔色も変った。しかし、わたしはこの事を心に留めた」。

重要な預言：25節〜28節

25 彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。
彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、
彼の手にわたされる。

ダニエルは、この角が聖者らと戦うのを見ます。天使は彼に、この角は三つの違法な行いをする王である、と説明しました。

①**いと高き方に尊大なことを語り**、

②**いと高き方の聖者らを迫害**し、

③**時と法を変えようとする**、と。そして

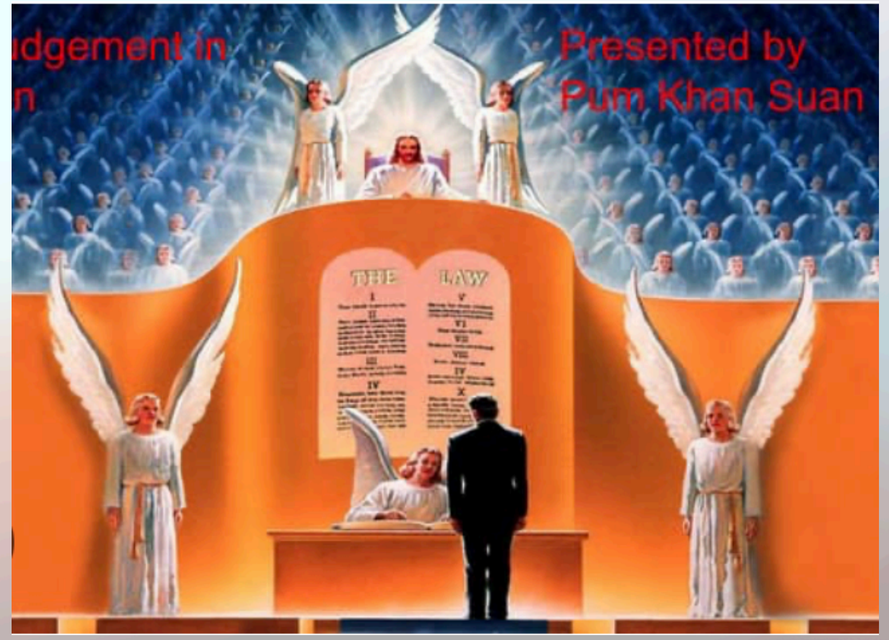
結果的に、**聖者らは彼の手に渡されます。**

重要な預言：25節〜28節

25 彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。
彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、
彼の手にわたされる。

次に天使は、小さな角が活動する時間枠：ひと時、ふた時、半時（口語訳）を示します。このような預言的言語の場合、「時」という言葉は「年」を意味します。それゆえ、これは預言的 3年半の期間であり、「1 日＝ 1 年の原則」に従えば、1260 年の期間を指し示しています。この間に、小さな角は神に対して攻撃を始め、聖者らを迫害し、神の律法を変えようと試みるでしょう。

4 頭の獣と小さな角の活動に関する幻のあと、預言者ダニエルは天における裁判の光景を見ます（ダニ 7：9、10、13、14）。裁判が開かれると、王座が据えられ、日の老いたる者がそこに座りました。天の光景が示すように、多くの天使が日の老いたる者の御前に仕え、裁き主が席に着き、巻物が広げられました。



この裁判に関して注目すべき重要なことは、それが**小さな角の 1260 年の活動期間（西暦 538〜1798 年）**のあと、**神の最終的な王国の樹立の前になされている**という点です。実際、幻の中で次のような連続が三回見られます。

小さな角の段階（538〜1798）

天の裁き

神の永遠の王国

7章の考察

(1) 7章は歴史と人生の正しい見方を教えてくれる。

天の情景が描かれていますが、地上に生きる私たちには見えません。地上では荒れ狂う海、そして獣たちが出てきて暴れます。天には厳然として荘厳な御座を眺めることができます。日々の様々な問題、世界の情勢がどうなろうとすべてに時が定められているということ。つまり7章は人生の苦しみの中にある時、上を見てごらん、というものです。日の老いたるお方が座しておられ、その前に人の子がおられて、わたしたちのためにすべてをなして下さっている。この7章は本当に素晴らしい励ましのメッセージです。

(2) 人生には二通りの生き方しかない。

7章には、二人の中心人物が登場しています。「小さい角」と「人の子のような者」。「小さい角には多いなことを語る口」があり、いと高き者に適して言葉を出します。つまりこれは自分を神にしようとする姿勢です。これは人間だれしも持っている罪の傾向です。造られた者で何の価値も無い者が、自分を大きな者だと思って大きなことを語り、いと高き者に敵して言葉を出すのです。これは根本的には、だれの心にも潜んでいる自分を神にしようとする傾向のことです

一方、もう一つの「人の子のような者」は、これと全く対照的です。これは人となられた神です。富んでおられたのに、貧しくなられた（2コリ8：9）。神であられたのに、十字架の死に至るまで従順であられた（ピリピ2：6-8）、人となられた神です。あなたはどちらを選びますか？

7章の「人の子」に関して「各時代の希望」より

悲しみの人で、病を知っておられたイエスが、失われた者を救うために、軽蔑され、侮辱され、嘲笑され、町から町へ追われながら働かれ、ついに使命を達成されたのを見る時、イエスがゲッセマネで大粒の血の汗を流し、十字架上で苦しみのうちに死なれたのを見る時、――われわれがこうしたことを見る時に、自分を認めてもらいたいという欲求の叫びは、もはやなくなる。イエスを見上げて、われわれは、自分自身の冷淡さ、無気力、利己心を恥じる。われわれは、主に心から奉仕することができさえすれば、何になってもよいし、あるいは何にもならなくてもよいのである。われわれは、主のためなら、イエスにならって十字架を負い、試練と恥と迫害に耐えることをよろこぶのである（各時代の希望、901p、48章）。

7章　完。